
イツツ・マイ・ターン

しじみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イツツ・マイ・ターン

【コード】

N0715U

【作者名】

しじみ

【あらすじ】

地元宮崎から遠く離れた茨城の大学に入学して一年が過ぎた。振り返ることを拒んできた過去に、僕はきちんと決着を付けないといけないのかもしれない。

一年の重み（1）

六月の蒸し暑い（太平洋に面し、六月半ばになっても梅雨が明けない茨城独特の）空気を肌を感じながら、僕は大学通りの緩やかな坂を上った。自転車なら少しお尻を浮かせるか、前屈みになりつつも座ったまま漕げる程度の傾斜である。車の交通量を無視した狭い道幅を別にすれば、大して苦にはならないが、僕は基本的に歩くことが好きな人間なので、この日も歩いて坂を上った。左手には僕の通っている大学があり、右手には半世紀前ですら営業していたのか怪しいほど荒びれた店の残骸が続いている。かろうじて読み取れる薬局の看板、もはや鉄屑を捨てるための場所となった自転車店、「入居者募集」の貼紙を携えたまま取り残されてしまった食堂の跡地。それらの死骸と大学の正門　三カ月前に改築されてかなり綺麗になっている　とを見比べると、哀れみを覚えずにはいられない。自転車店だった建物の入り口付近には「大学通り」と記された看板が、真っ白な鉄柱に支えられて立っている。その看板は他国の領土を奪った見せつけに立てる国旗のような印象を僕に与え、その鉄柱は周りの積み上げられた鉄屑を嘲笑うかのように真っ白だった。哀れみは一段と強くなる。

大学通り　大学のある地域ならどこにでも存在しそうな名前だと僕は思う。至ってシンプルで分かりやすい。興味を持たれる名前でもないが、嫌われる名前でもない。それはまさに、僕が理想とする無利無害を成している。誰も傷つけず、誰にも傷つけられず、ただそこにあるだけの存在。しかし、それがないと幾分か困ってしまう存在。思わず、複雑な　自嘲に近い笑みをこぼしてしまう。

僕はズボンの右ポケットから携帯電話　僕はいつも左ポケットに財布、右ポケットに携帯電話を入れる　を取り出し時間を確認した。八時二十五分。次いで空を見上げ、身体を取り巻く空気を感ずる。うん、間違いないな。この季節のこの時間帯にふさわしい空

模様、空気感だ。夜八時を回った空は一様に暗く、夕日の残り火など一切持ち合わせていないが、大気中には夕日の温もりが残っているのだ。ぬるっとした層に覆われた地上からは星の一つも見えないものだから、僕は六月という季節があまり好きではない。

大学の正門を少し過ぎたところで右に曲がり、ひどく静かな小路に入る。そこで煙草を口にくわえて火を点けた。人通りの全くない小路だ、歩き煙草ぐらい誰の迷惑にもならないだろう。携帯灰皿を持ち歩く周到さは持ち合わせていないが、平気でポイ捨てるような腐った心も持ち合わせていない。僕が一本の煙草を吸い終わるまで約六分、ここから工藤先輩の家まで辿り着くには十分な時間だ。

一年の重み(2)

錆びついたブランコと大小二つの鉄棒　多くの不幸と少しの幸せを背負って慎ましい生活を送る親子のように見える　だけの小さな公園の向かい側に、二階建てのアパートがある。白い塗装は所々黄ばんでおり、階段の手すりは赤茶色に染まりきっている。日当たりが悪く見た目あまりぱっとしないが、家賃が安くて大学にも近いという、要するに、一般的な大学生が一人暮らしをしているタイプのアパートだ。各階に四部屋ずつ、計八部屋ある。

一階の右角部屋のポストには、いつも新聞がたっぷり挟み込まれている。ほとんどビニール包装のされていない新聞だから、おそらく梅雨入り前のものだろう。ビニール包装された新聞は、ドアの横に積み上げられていた。

僕は短くなつた煙草をもう一口吸い、その部屋の（アパートの外見に似合わず、綺麗に澄んだ音を出す）チャイムを鳴らして、返事をする前にドアを開けた。鍵が掛かっていることなど百も承知なのだ。玄関には使い古してあるサンダルと、就活に使うと思われる革靴が一足ずつだけ置いてあった。玄関を上がると台所があり、その奥に七畳間の部屋がある作りになっている。玄関から見える範囲だけでもかなり散らかっている。

「おじやまします」と台所の奥に向かって言うと「おう」とだけ返ってきた。僕はサンダルを脱いで部屋に上がり、ガスコンロの上に置かれたビールの空き缶の飲み口で煙草を消してからその中に吸殻を捨てた。自分で料理をしない工藤先輩はまったく気にならないのだろうけど、コンロの上に灰皿（の代わりとなっている空き缶）を置くのはいただけない。案の定、黒いコンロには大量の灰が散っており、少なくとも一週間は放置されているであろうフライパンの中にも灰が見られた。

台所の道を塞ぐゴミ袋やダンボール箱を大股で越えて奥の部屋に

辿り着くと、彼はすでに一人でウイスキーを飲んでいた。

部屋にはベッド、テーブル、本棚、パソコンが置いてあり、七畳の広さには見えない。それに加えて、本や衣服が散乱しているため余計に狭く見える。カーペットには皺が寄っており、お菓子の屑がちらほらと目に入る。テーブルの上には、前回の飲み会で食べたポテトチップスの袋がそのままの形で置いてあった。お世辞にも綺麗な部屋とは言えず、彼が手にしているグラスも、使う前にちゃんと洗ったのか怪しい。

「相変わらず汚い部屋ですね」と僕は言った。綺麗な部屋ですね、と言っても良かったのだが、ここまで汚いと皮肉を言う気にもならない。

「他の連中が来る前に片付けるからちょっと手伝って」と彼は言って立ち上がった。座っているときは分かり辛いのが、彼は百八十センチを越える長身だ。手足がすらつとしていて、かなり痩せ型な体格であるた分、縦にはより大きく見える。おしゃれには興味がないことを主張しているような服装と、寝癖が付いたままの髪をいつもしており、女性から好かれるような感じではないが、顔立ちはかなり整っている。

僕ははとりとめのない話をしながら、飲み会が出来るだけのスペースを確保するため、雑然とした部屋の片付けに当たった。

この飲み会は毎週水曜日に開かれる。参加するメンバーはサークルの仲間で、僕と工藤先輩の他に二人の先輩が来る。その中で工藤先輩が一番年の近い人なのだが、それでも僕より四つ年上だ。年齢の差はあるものの、僕はこの飲み会の場をとて心地よく感じている。みんなと気が合うというわけでもないのだが、好きな本、曲、映画、食べ物などあらゆる面で趣味が合わない。それは幼少期のころ、社会という空間から隔離された状況で味わうことのできた、柔らかな抱擁感に似ている。あるいは僕がその感覚を味わいたいと（無意識のうちに）望み、飲み会というスクリーンに投影していたのかもしれない。

「よし、これくらいでいいだろ」

工藤先輩の声に振り向いて辺りを見渡すと、まったくと言っていいほど片付いていなかった。確かに一応のスペースは出来ているのだが、壁際には所狭しと物が積み上げられている。

「男の部屋つてのはこんなもんだ。あんまり綺麗にしすぎると居心地が悪くなっちまう。生ごみさへちゃんと捨てとけば、虫で溢れかえることもないしな」

自慢げにそう言われると、僕としては溜め息をついて返すしかない。僕が畳みかけていた服を部屋の隅へ運ぼうとしたとき、先輩の携帯が鳴った。彼は個性的な動作（両手の親指と人差し指だけで、まるで汚いものを触るような動き）で携帯を開いて電話に出た。しばらく彼は「あー、うん」と曖昧な返事を繰り返して電話を切った。「今日の飲み会、なしになったわ」と彼は無表情に言った。

今日の飲み会は、なしになったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0715u/>

イツ・マイ・ターン

2011年6月16日08時25分発行